学校評議員会記録

開催日時	令和３年６月 24 日（木）　　10 時 00 分～11 時 30 分	
会　　場	校長室	
出席者数	学校評議員　５名中３名（所用のために２名欠席）	学校　校長、副校長、教頭、事務長

次第および校長が意見を求めた事項

１　委嘱状交付

２　開　　会

３　校長挨拶

４　自己紹介

５　学校見学・授業参観

６　報告・説明事項

(1) 令和３年度の学校経営方針等について（校長）

ア　色のイメージ

グランドデザインの項目を６色に色分けしている。黄色は、「児童生徒、学校教育目標」、青色は、「信頼」、橙色は、「協働」、緑色は、「感動」、小豆色は、「育てたい資質・能力」、藍色は、「評価・積み重ね」としている。

イ　すべては児童生徒のために

ここでは、主語を児童生徒として捉え、常に児童生徒が中心であることを意識し、社会で生活するために必要な力を身に付けたり、成長したりするためには、何をすべきか、何をしなくてはならないのかが重要であると考えている。そして、学校、寄宿舎、事務が協働すること、保護者や地域と連携すること、児童生徒のために妥協しないことが大切であると考えている。

ウ　教職員の参画

帯広養護学校のグランドデザインは、教職員全員で作り上げるものと考えている。今年２月には、全教職員にグランドデザインの原案を提示して、意見を募集した。全教職員がグランドデザインの内容を理解し、自ら取り組むために何が必要なのかを自分事として捉え、実践することが大切であると考える。そのためには、一人一人が目的意識を高め、相手意識をもつことが重要であると考える。また、共通理解し、協働するためにはコミュニケーション力が大切であり、会話や雑談も必要だが、一番は対話であると考える。そして、指導の意味の共有といった積極的な対話ができる職場でありたいと考えている。

エ　学校教育目標

学校教育目標は、「明るく、豊かに、たくましく、自ら考え、社会に生きる人を育てる」である。

学校教育目標は、新学習指導要領の主体的・対話的で深い学びと関連付け、「何ができるか、できることをどう使うか、いかに生活でできるようになるのか」ということが示されている。最終的に社会で生きる人を育てるために、形や方法が異なっていても、自分の力で生活自立ができることや自分の存在意義や価値を見い出せること、社会貢献しているという喜びや達成感、成就感を味わえること、そして、高等部を卒業したとき、どのような形でも就労に結び付くことが、社会自立、参加ができる人の育成につながると考える。

オ　目指す学校の姿

目指す学校の姿として、「共に学び、共に育つ学校～信頼・協力・感動～」としている。「子どもと学び、保護者と学び、地域と学ぶ」は今年度までの３カ年計画の学校経営ビジョンに明記されていた内容であるが、目指す学校の姿として、「子どもと、保護者と、地域と」と文言を修正し、我々一人一人がそして、組織として学びを大切にし、共に成長することを本校

の姿と考える。

一つ目は、児童生徒が通いたいと思える学びのある学校である。児童生徒の元気な姿や笑い声が満ちあふれ、教職員が笑顔で児童生徒と接し、楽しさを明るさが感じられ、自主性と主体性を重視し、可能性を伸ばすことができる学校を目指す。

二つ目は、保護者が安心して通わせたいと思える開かれた学校である。根拠に基づいた指導がなされ、人権を尊重するとともに児童生徒や保護者の声に耳を傾けることを大切にする学校を目指す。

三つ目は、地域がともに育てたいと思える貢献する学校である。地域資源の積極的な活用及び協働に努め、地域社会に認められ、貢献できる教育活動を実践する学校を目指す。広瀬評議員から「町内会の立場で何かあればいつでも協力しますよ。」というお声を掛けていただいたが、このことを大切にして教育活動を進めていきたい。また、コロナ禍で校外での活動は難しいが、この関係性を大切にさせていただきたい。

四つ目は、教職員が働きたいと思える協働し、専門性を発揮できる学校である。教育の質や専門性の向上を図ることに妥協せず、専門性を生かすとともに発揮するために教職員一人一人が健康で豊かな生活を送ることができる学校を目指す。

カ　目指す子どもの姿

目指す人間像を、「目指す子どもの姿」と合わせて、「目指す子どもの姿」に改めた。そして、「五つの人間像」を「育成を目指す資質・能力の三つの柱」に基づき、「三つの子どもの姿」とした。ここでは、自主性や主体性、言語理解と言語表現など、自分の意志を言葉や行動で表現できることが子どもの姿と考える。

一つ目は、学んだことを生活に活かせる子どもである。自分の良さが分かり、社会生活に必要な知識・技能・態度・習慣等、身に付けたことを自ら表現することができる子どもを目指す。字が読めたり、金銭を扱ったりすることができる力を身に付けることは大事であるが、子どもたちの将来の姿を想像したときに、自分一人で買い物に行くことが難しい方もいる。そうであれば、自分で買いたいものが選択できる力を身に付けることができる学習が大事になる。それが学んだことを将来に生かすことにつながると考える。

二つ目は、自分の言葉で理解し、表出できる子どもである。言語活動の充実を図り、知識の理解や情報の獲得などといった言語能力を身に付け、分かる喜びや伝わる喜びが感じることができる子どもを目指す。うまく伝わらないので泣いたり、怒ったり、いろいろな表出の仕方があるが、なぜそうなっているのかを我々が把握することが大事である。また、泣いていることについてカードを使って把握するなど様々な表出の仕方を引き出していくことが大事である。

三つ目は、自分で考え、やりたいと思える子どもである。指示された事柄に取り組むことや指示を待つのではなく、自ら発信することや自ら行動することなど、自己実現に向かうことができる子どもを目指す。指導していると声を掛け過ぎたり、教えすぎたりすることがある。待つことや大人の数を減らすことも大事でるが、将来は、支援者の少ない中で生活をするので、そのことも意識しながら学習を進めていくことも大事である。

キ　目指す教職員の姿

目指す学校の姿、目指す子どもの姿とあわせて目指す教職員の姿を設定した。教職員一人一人が目的意識と相手意識をもち、児童生徒の指導にあたることを教職員の姿と考える。

一つ目は、専門性向上のために学び続ける教職員である。教職員一人一人が常に研究や修養に努め、児童生徒理解の一層の充実を図り、研究授業や公開授業研究会等を通し、授業改善及び指導力の向上を図ることができる教職員を目指す。

二つ目は、児童生徒の主体性を重視した指導のできる教職員である。「させる・やらせる」といった指導者の視点ではなく、「できるようになるためにどうのようにするのか？」という指導の視点に立ち、一人一人の将来を見据え、可能性を引き出すことのできる教職員を目指す。

三つ目は、児童生徒や保護者、同僚から信頼される教職員を目指す。人権を尊重するとともに合意形成を図り、傾聴と対話することを大切にして、児童生徒の成長を本人や保護者、地域の方々などと共感できる教職員を目指す。

ク　育てたい資質・能力

一つ目は、生活に活かせる力を育てるである。「何を理解しているか、何ができるか」の育

成を目指す。

二つ目は、自分の思いを伝えられる力を育てるである。「理解していることやできることをどう使うのか」の育成を目指す。

三つ目は、自分から取り組める力を育てるである。どのように社会や人と関われるか、受け入れられるか」の育成を目指す。児童生徒の「できた・やれた・伝わった・分かった」を大切にして、「させられる学習ではなく、自らする学習」「教えるよりも自ら学ぶ学習」「人間性を育てる学習」「生活に適応できる学習」など、子ども一人一人の存在に注目する教育を推進し、どのような授業が 生活の質を高めることになるのか、指導や支援のあり方、対応の仕方等、一層の充実に努める。

ケ　重点教育目標

社会自立、参加につながる 12 年間の積み重ねが大切であると考える。生活の質を高めることを意識して基本的生活習慣の確立を生活の中心とした課題解決学習の充実や就労への適応、集団生活での人との関わり、横断的、系統的で連続性や一貫性を重視した指導内容、方法の充実を図ることが重要であると考える。そして、主体的、対話的で深い学びを明確にした授業実践と様々名評価を活用し、検証・改善を行い、指導の質を向上させて児童生徒の発達を推進することを目指す。

コ　具体的な取り組み

言語環境を整える取り組みを行っている。指導をする上では、丁寧で優しい言葉掛けをすることが大事であると考える。敬称を付けることと付けないことの違いにより、次に出てくる言葉が変わる。また、小学部から高等部までは 12 年間の期間があるが、年齢相応の関わり方が大事であると考える。

(2) 令和３年度の教育活動について

ア　小学部・中学部の教育（教頭）

グランドデザインを受けて小学部、中学部の学部目標や方針を設定している。小学部は、主に日常生活の指導や遊びの指導、生活単元学習などを行っている。体づくりでは、主に廊下を歩く運動を行っている。生活単元学習は、将来の社会生活に必要な事柄を学習している。

中学部では、小学部の指導形態に作業学習が追加される。作業学習では、将来の進路を見据えた指導・支援を行い、陶芸班、しいたけ班、紙工班などの縦割りグループに分かれ、学習をしている。中学部の生活単元学習では、公共のマナーを学ぶなど小学部に比べ、校外で学習する機会も増える。また、体力作りは、グラウンドでマラソンやサーキットを行っている。さらに、教科別の学習では、国語、数学、美術、音楽、体育を行っている。総合的な学習の時間では、プルタブ回収など、地域の方々とのふれあいや地域貢献活動に取り組んでいる。

交流学習では、帯広第２中学校１年生とも交流している。

イ　高等部・訪問教育学級の教育（副校長）

高等部では、出口の教育を意識した指導を行っている。そして、卒業後社会で働く力を身に付けるために、時間割の中で作業学習の時間が多く配分されている。また、日常の学習がどのくらい身に付いているかを確認するために現場実習を行っているが、今年度は、昨年同様コロナ禍で、例年のような形態で現場実習を行うことができない状況にある。その他、中学部同様、各教科を合わせた指導や教科別の指導も行っている。

訪問教育学級では、在宅訪問と帯広病院への訪問、帯広厚生病院への訪問など、三つの訪問形態がある。現在、コロナウイルスの影響で病院への訪問ができないため、学習ができない状況が続いている。しかし、７月からは、帯広病院では、病院内の一室と病室とオンラインでつなぎ、授業ができる予定である。在宅生は、自宅に訪問して学習を行うが、行事の際には、自宅と学校オンラインでつないで学習を行った。

(3) コミュニティ・スクールについて（副校長）

コミュニティ・スクールを導入する最大の意義は、共生社会の実現である。そこで、昨年度から帯広養護学校、帯広聾学校、帯広盲学校の３校で合同のコミュニティ・スクールを立ち上げることができないか検討している。検討する上で最も大切なことは、テーマを何にするか明確にすることであると考える。現在、学校ごとに検討しているところだが、養護学校は、各教科等を合

わせた指導という指導形態があるので学習内容を柔軟に設定することができる。しかし、盲学校や聾学校は、教科学習が中心なので、学習内容の柔軟な設定が難しい状況にある。

３校で一致するテーマとしては、安心・安全など、地域の防災教育が考えられるが、校区を考えるとエリアが広く、各校の役割も多岐にわたる現状がある。そして、小学校のコミュニティ・スクールとは地域の設定の仕方や進め方などが異なることが考えられる。

（校長より補足説明）

３校合同の目的は、学校評議員のメンバーが３校で重複することがきっかけとなっている。もし、各校で行うとした場合は、学校評議員会が土台となると思う。

７　評議事項

(1) 令和３年度の学校経営方針等について

(2) 令和３年度の教育活動に対する意見等

(3) コミュニティ・スクールについて

（学校評議員）

毎年一回程度、校内見学をさせていただいているが、第一印象として、児童生徒の動きが少しずつ変化してきていることを感じた。教職員が児童生徒のことを理解し、コミュニケーションの取り方を工夫して取り組んでいるのではないかと思う。

地域との関わりとして、年に１度程度、会合の機会と抱き合わせて、学校を見学させていただけると大変有り難いと思う。

（学校評議員）

評議員を務めて３年目となる。最初に学校を訪問した頃と比較すると、本日の教育活動が前進している印象を受けた。そして、児童生徒を中心に置いた教育活動が浸透している印象を受けた。

今回の見学を通して、就学前の子どもが、学校ときちんとつながっていく必要性を感じ、太変勉強になった。

養護学校、聾学校、盲学校３校合同コミュニティ・スクールに関しする説明を聞いて３校が置かれている状況が分かった。今後も評議員として務めさせていただくことをお願いする。

小学部１、２年生の児童の様子を見て、すごいと感じたことは、他の場所ではいつもと違う表情を見せていた。ほほえんだり、手を振ったりするなど、訪問者に対しての警戒感が少なかった。ある女児の場合は、関わりの面で難しいところもあったが、たまたまスーパーで会ったときには、穏やかな表情を見せてくれた。学校が、児童にとって落ち着ける環境になっていることを感じた。

（学校評議員）

授業の様子を見学した後で「グランドデザイン」の話を聞き、校内に浸透していることを感じた。中学部の作業学習（窯業班）では、型を丸く切り取る際に使う道具の扱いについて、「尖った道具なので持たせない」となりがちになるところを、「気を付けて持ってきてね」と生徒を信じ、委ねる場面があったところが印象的であった。また、別の生徒が型を時計回りに切っているところでは、彼が行いやすい方向に変えるなど生徒に寄り添う様子が感じられた。

計画を整えたことだけではなく、その意味合いがソフト面のところにも浸透していることを感じた。計画と実際の授業場面がつながっていることを実感した。

児童生徒の可能性をどう捉えていくか、生徒の動きを「待つ」視点では、ホールに置かれたベンチの下に横たわっている生徒を教師が待っている場面を見て、通常の学校ではできないことであると感じた。特別支援学校の役割や意義はここにあると感じた。そして、「子どもと学ぶ」「保護者と学ぶ」ことを、見学を通して学んだ。また、児童生徒の年齢に合わせていくことの大切さ、教育現場だからこそできる柔軟さの点など、様々な工夫が取り組まれていることが改めて分かった。

養護学校、聾学校、盲学校３校合同コミュニティ・スクールについては、各学校を訪問して、雰囲気の違いをものすごく感じる。「合同」はハードルが高いと思う。また、「共通言語」が見つからず、ペースもかなり違う。評議員会の開催を例にとると、養護学校では 9:30-11:30 の開催であるが、聾学校の場合は 18:15 から始まり、同窓生も委員に入っている。

３校で共通に進めていくことは、ハードルが高いと感じるので、何か行事を合同で行ってみるなど、スモールステップで始めてはどうかと考える。また、各学校が描く「地域」のイメージも違うことや取り組んでいること、「文化」の違いなどもある。取組の方向性を少しずつ、具体的に詰めていく必要があり、まずは、距離を縮めていくところからのスタートであると考える。

【校　長】
３校合同コミュニティ・スクールについては、ハードルが高いところが課題であり、立ち上げることが難しいようであれば、学校ごとに進めることでもよいと考える。現在、どのように進めていけばよいかと学校ごとに検討している。

【副校長】
評議員の方々には、今後も様々なご意見をいただきたいと考えている。次回学校評議員会は、９月下旬、３回目は２月を予定している。開催の一か月前には日程調整の連絡をする予定である。

８　閉　　会

上記のとおり会議を開催した。

令和３（2021 年）年６月 24 日

北海道帯広養護学校長　　山　本　貴　路